

# 「取り付け騒ぎ」に関する理論的・実験的分析と事例との整合性に関する考察<sup>1)</sup>

A Study of the Consistency Between Theoretical and Experimental Analysis of Bank Runs and the Case Study of an Actual Bank Run in Japan

有馬守康<sup>2)</sup>  
齋藤哲哉<sup>3)</sup>  
小林創<sup>4)</sup>  
稲葉大<sup>5)</sup>

## 1. はじめに

本考察の対象である「取り付け騒ぎ」に端を発する金融危機は、世界のあらゆるところで定期的に引き起こされる可能性に直面しており、残念ながらそれを完全に回避する方法を経済学は常に模索してきているが、その方法を見出すには至っていないのが現状である。最近では2013年のキプロス金融危機で取り付け騒ぎによる破綻を恐れて銀行が封鎖され、2008年のサブプライム危機でもモーゲージ会社の債権に投げ売りが発生し、ある意味で取り付け騒ぎに似た状況が発生している（Gertler and Kiyotaki (2015) など）。同様に今後も起こるであろう金融危機に対し、誤った対処で金融危機を拡大させることなく、適切な政策を打ち立てられることが必要とされる。そうした問題意識の下、本プロジェクトが始動し、理論モデルに実験を加えることで、利得向上を目指す被験者の個人的な意思決定の下、どのような状況下で取り付け騒ぎが発生し、金融危機まで発展するかを検証していった。

本稿の役割は、今回行われた理論分析と実験分析の構造とその検証結果を簡単に振り返り紹介しつつ、我々の現実の世界で起きた、取り付け騒ぎに基づく事例研究と対比し、その整合性を確認していくことにある。今回取り上げる事例は、他編でも指摘されている通り注目されている事例である、実際には健全な経営を行っている金融機関で起きた取り付け騒ぎ（豊川信用金庫、佐賀銀行）を中心にみていくことにする。また、実験が国内で行われていることを勘案し、国内での取り付け騒ぎに限定して、実際に取り付け騒ぎが行われたいくつかの事例をその発生因ごとに分類し紹介しつつ、その時起きた発生原因とモデルの整合性が保たれているかを検証していく。

本論文の構成は次のとおりである。

2章では、今回、チームで用いた取り付け騒ぎに関する理論モデルを事例と対比できる程度に簡単に紹介していく。3章では、同様にチームで行った関西大学での実験に関する概要と、その実行結果を事例と関連付けられる程度に簡単に説明する。4章では、日本で実際に起きた取り付け騒ぎを原因別に分類したのち、健全な金融機関にもかかわらず、取り付け騒ぎに直面した事例として、主に1973年に起きた豊川信用金庫の取り付け騒ぎを中心に据えて詳細に述べ、原因を分析したうえで、本研究との整合性

を確認することにする。そして5章で、本論のまとめを述べていくことにする。

## 2. 理論モデル

理論モデルの詳細については他編にて詳細を伝えている。したがって、ここでは本稿単体として読んだ場合に必要とされる理論モデルの前提と結論のみを簡潔に紹介する。今回必要とされる我々のチームが構築した理論モデルの基本的な考え方は、ソルベンシーマージン（支払い余力） $M$ が、その金融機関の預金者のうち、引き出しを行う総額を下回るときに取り付け騒ぎが起こるという前提からスタートする。預金を引き出す者たちの利得を、金融機関が破綻する・しないで場合分けし、各預金者の引き出す確率  $p_i$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) と、金融機関の破綻の確率  $q = q(p_1, \dots, p_i, \dots, p_n)$  として与えることによって、預金者の期待利得  $V_i$  の式を立てる。

これを各個人の引き出す確率  $p_i$  で微分しイコールゼロと置くと、混合戦略での一階の条件が導出される。

ここから対称均衡を仮定して、各預金者の最適引き出し確率  $p$  と、期待利得  $V$  との関係から、金融破綻を引き起こす条件を準備率  $s \equiv \frac{M}{D}$  で表して導出できる。それが、

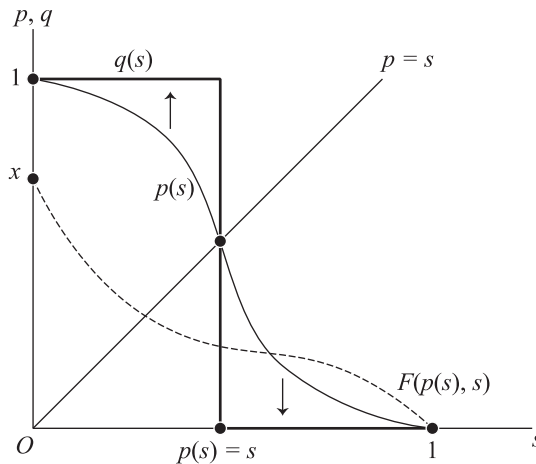
$$\begin{cases} M \leq pD & \Leftrightarrow p \geq s \text{ より} \\ q = \begin{cases} 0 & \text{if } s \geq p \\ 1 & \text{if } s < p \end{cases} \end{cases}$$

である。  $p(0) = 1, p(1) = 0$  であるので、横軸に  $s$  を取り、縦軸に  $p$  (および  $q$ ) をとると、 $(1, 0)$  と  $(0, 1)$  を通る右下がりの曲線を描く。また、 $p(s)$  関数は、ほぼ全ての点で連続で微分可能な曲線である。

これより、 $s^* = p(s^*)$  を満たす不動点  $s^* = \frac{M}{D}$  があることが示される。

$p \neq s$  の場合を考えると、一階の条件は以下のようにさらに単純化される。

$$\frac{\partial V_i}{\partial p_i} \geq 0 \Leftrightarrow q \geq F(p, s) \equiv \frac{px}{p+s} \quad (\text{ただし } x \text{ は利子率})$$



「取り付け騒ぎ」に関する理論的・実験的分析と事例との整合性に関する考察（有馬，齋藤，小林，稲葉）

また、 $F$  は  $s$  の減少関数で、 $F(0)=x$ 、 $F(1)=0$  より、上図を得る。もし、完全合理性のモデルを仮定するならば、 $p$  と  $q$  が一致するが、現実の預金者の非合理性を認めると、 $q=0$  で  $p>0$  のような結果も起こり得る。

### 3. 実験概要と結論

以上のモデルの有効性を検証するために、Garratte and Keister (2009) を用いてその再現実験を行うことによって、現実との整合性の有無を確かめた。この内容に関しても他編にて詳細は語られるので、ここでは本稿を読むのに必要な情報だけに留める。

この実験は2016年8月2日から、2017年7月13日まで、計8回行われた。実験場所は関西大学の研究所内で、関西大学の学生を集めて行われた。学生をグループごとに分け、銀行の体力の大小、強制引出しの有無等、変化をつけ、複数回行なった。当初、預金者は引き出す場合のみ、ボタンをクリックし、そのまま預け入れることを選択した人は、時間まで待てばよいシステムで行われた。すると、金融機関が破綻する率が理論の予想よりも高く出た。これは恐らく他人のクリック音が、その人が引き出したことを示すシグナルとなり、破綻の可能性の高まりを他の預金者に予想させたと考えられた。したがって、以降ボタンを「預金を引き出す」と「預金を引き出さない」の2種類用意し、再実験したところ、理論の予想によく当てはまって破綻の危機が生じにくい非常に安定した結果が導出された。

### 4. 事例研究：健全な金融機関に起きた取り付け騒ぎ

以上のように、モデル分析では準備率  $s$  の大きさが、個人の預金引き出し行動の確率に影響し、支払い余力が大きいほど、引き出し確率が下がり、それゆえ取り付け騒ぎを起こしにくいという結果を導出した。それに対し、実験分析では、モデルの整合性を裏付けつつも、意外なところから金融破綻の確率を上げる結果をもたらした。それは当初の実験設計では、銀行から預金を引き出す際には引き出しボタンをクリックすることで引き出しが行われていたものの、引き出さない場合はそのボタンを一定時間押さないという選択をすることによって意思表示が行われていた。この場合、引き出す者がいることが、クリック音によって他の被験者に伝わることとなった。これが引き金となって引き出し確率を上げたのではないかという結論に結びついた。したがって、修正版の実験では、引き出さない場合も「預金を引き出さない」ボタンを押すように設計し直し、どの被験者もボタンをクリックするようにした結果、非常に安定した結果が生じることとなった。今回の実験では、クリック音が他人の引き出し行動のシグナルとなり、他の預金引き出し行動を助長した可能性が高い。

そこで本章では、他人の発したクリック音に該当する「何か」が原因で、実際には健全であった金融機関が取り付け騒ぎの危機に直面する事例を国内でいくつか紹介し、理論・実験面との整合性を検証していく。

#### (1) 取り付け騒ぎのあった具体的事例の分類

まずは日本国内で起こった主な取り付け騒ぎの事例を取り上げ、それぞれその要因別に以下の表に分類していく。

この表で、今回の理論的・実験的分析にとって、より関心のある事案は、表の最後の豊川信用金庫と佐賀銀行の取り付け騒ぎの件である。経営は健全であっても、風評によって取り付け騒ぎまで発展したケースである。以下ではその2件についてできる限り詳細に記述し、理論・実験との整合性を検証して

表1 主要な取り付け騒ぎの発生原因別分類

発生原因による区別	発生原因	具体的事例	備考
経営責任あり	業績悪化	(東京渡邊銀行), (東京協和信用組合), 安全信用組合, 木津信用組合, 三洋証券, (山一証券), 日本長期信用銀行など	過大な不良債権を積み上げ破綻した。 経営者の多くは責任追及された。
	不祥事の発生	東洋信用金庫, 東京協和信用組合, 山一証券など	東洋信金以外は, 経営悪化と経営上の不祥事が重なっている。
	システム障害	UFJ銀行, みずほ銀行	システム障害による店頭混乱。
経営責任なし	自然災害 (地震等)	関東大震災の被災銀行, 阪神大震災の被災銀行等, 被災地の銀行	被災銀行の預金者に影響が出た。
	失言・風評	東京渡邊銀行, 豊川信用金庫, 佐賀銀行	豊川信金と佐賀銀行の経営は健全だった。

※長岡・武村(2008) p.13 から抜粋, ( ) が付いているものは2か所で当てはまる事例。

いく。また、その他の事例として本章の最後に木津信用組合、および東京渡邊銀行の破綻のプロセスについても若干触れていくことにする。

### (2) 佐賀銀行の取り付け騒ぎの事例：風評被害によるもの

まず、2003年の佐賀銀行の一件<sup>6)</sup>は、ある女性の「12/26に同銀行が潰れる」という悪質なチェーンメールがデマを拡大し、預金者の不安を掻き立てる形で発生した。その結果、前日25日の夕刻に200人もの行列ができ、それを見た他の顧客も不安に駆られて行列に並ぶという悪循環が生まれた。この取り付け騒ぎで、佐賀銀行では前年同日比で180億円もの引き出しが発生し、3万2000件もの取引件数を記録した。なお、この女性は信用棄損容疑で書類送検されている。この場合、どうして信ぴょう性のないメールに多くの預金者が引き出し行為を行い、取り付け騒ぎまで発展したのか、詳細は明らかになってはいないが、いくつかの要因として挙げられているものは、不況下にあったこと、資金繰りに問題になりそうな年末に該当していたこと、および事件の数か月前に実際に佐賀商工共済協同組合の破綻があったことも、騒ぎを大きくした一因とされている<sup>7)</sup>。

### (3) 豊川信用金庫の取り付け騒ぎの事例：噂が取り付け騒ぎを生んだもの

その一方で、豊川信用金庫の一件では「悪意のない」地域住民による、豊川信用金庫が危ないという風評によって発生した点で注目に値する。しかも、この事件では、警察が信用毀損業務妨害の疑いで捜査を行い、この風評の発生源が特定されているという点で興味深い。以降はこの豊川信用金庫で起きた取り付け騒ぎ事件について、やや詳細に説明していく<sup>8)</sup>。

この事件は1973年12月に発生したもので、愛知県宝飯郡小坂井町(現・豊川市)を中心として、「豊川信用金庫が倒産するらしい」という風評が立ち、それから数日のうちにパニックに陥った預金者によって同信用金庫から約20億円もの預金引き出されたという事件である。警察が信用毀損業務妨害の疑いに該当しうる事案であるため、発信元を追跡していくと、意外なところが発生源となっていた。

「取り付け騒ぎ」に関する理論的・実験的分析と事例との整合性に関する考察（有馬，齋藤，小林，稲葉）

この事件の発生は、12月8日の女子高生3人組の他愛のない会話から始まった。

ちょうど豊川信用金庫に就職が決まったAが、その話を友人のB、Cにした。するとB、Cは「信用金庫は危ないわよ」とからかった。この危ないという表現はもちろん、経営が危ないという意味ではなく、単に強盗等に入られる危険性がある、ということの意味する表現であったようだ。しかし、このからかいを真に受けたAは、その日の夜に親戚のDに「信用金庫は危ないのか」と尋ねた。Dはそれを豊川信用金庫を指していると解釈し、同信用金庫近くに住む親戚Eに確認した。

Eは近く的美容院経営者のFに「豊川信用金庫は危ないらしい」という推量形で伝えた。Fが親戚Gにそれを伝える際に居合わせたクリーニング業者のHの耳に入り、その妻Iにもその話が伝わった。ここから噂は「潰れる」という断定調で大きく広がっていった。

同13日、Iの店に来たJが電話を借り、Jの妻へ「豊川信用金庫から120万円をおろしてくれ」との指示を与えた。Jはこの時点では噂のことは全く知らず、単に仕事の取引に必要な金を引き出しただけであった。しかし、これを聞いたIは、豊川信用金庫が潰れるので、その前に金を引き出しているものと勘違いし、豊川信用金庫が潰れるという噂はIにとって確信に変わり、夫のHを通じて180万円を降ろした。

この後、HとIは知人20人程度に電話を通じて噂を広めたのだが、その中にいたアマチュア無線愛好家が無線を用いてさらに広く噂を流し、ほぼ町中で豊川信用金庫が潰れるという話を耳にする事態となった。女子高生の会話から1週間もたたない12月13日には、同信金に59人が殺到し、およそ5000万円が引き出されることになった。

12月14日には、同信用金庫が、経営上のことに不信がある方は2階へ上がるよう張り紙を出し事態の收拾を図った。しかし、噂から確信へと信念を変更させた預金者にとっては、逆効果であった。この張り紙は2階で倒産整理の話し合いをしていると曲解され、ただちにその張り紙は剥がされることになった。信金側の良かれと思ってすることはしばしば逆効果に働き、その行為自体が同信金が潰れるのを隠ぺいする行為だと思わせる結果になった。そこで信用組合側はマスコミ各社に依頼し、それがデマであるという記事を掲載してもらった。同時に事態を受けた日本銀行は、考査局長が記者会見を行い、同信用金庫の経営について「問題ない」との発言をした上で、誤解による混乱を避けるため、日本銀行名古屋支店を通じて現金手当てを行ったことを明らかにした。また預金者への安全であるシグナルとして、本店の大金庫前に日銀から輸送された現金が窓口からも見えるように高さ1m、幅5mに渡って山積みされた。

店頭で全国信用金庫連合会、全国信用金庫協会連名のビラを張り出し、同時に常務理事による預金者への説得活動も行われた結果、騒動は沈静化に向かった。

しかし、警察がこのデマのルートを特定しても、「豊川信金は潰れたのではないか」「3人の噂話がここまで大きくなるはずはない。裏に組織的な陰謀があり、警察発表は政治的なものだ」などと主張する者もあり、デマはすぐには消滅しなかった。

#### (4) 不安→噂→風評で起きた豊川信用金庫の取り付け騒ぎの分析

以上が豊川信用金庫で起きた取り付け騒ぎの顛末である。

ここで着目する点としては、豊川信用金庫破綻の噂の伝言ゲームが、疑問形から憶測、確信に変わるプロセスである<sup>9)</sup>。

まず、噂が広まりやすくなっていた時代的下地として、トイレトペーパー騒動など、オイルショッ



クによる不景気があり、さらに7年前の1966年に隣町の豊橋市で中日本産業という金融機関の倒産という事実があり、いつどの金融機関が潰れてもおかしくないという状況があった。しかも、噂の伝播関係者の一人、クリーニング業のHも、この7年前の中日本産業の倒産被害者の一人であったため、善意で周囲の人間に噂を広めてしまった。さらにそのクリーニング店で電話を借りて豊川信用金庫から引き出しを行ったJの偶然の行為も、単なる噂が真実性を加える、いわゆるオーバーヒアリング効果<sup>10)</sup>として大きな要因になったと考えられる。

また、地域的特性として、預金比率が全国的にみても高い地域であったこと、この地域における実質的な金融機関が豊川信用金庫ただ1つであったことも災いした。

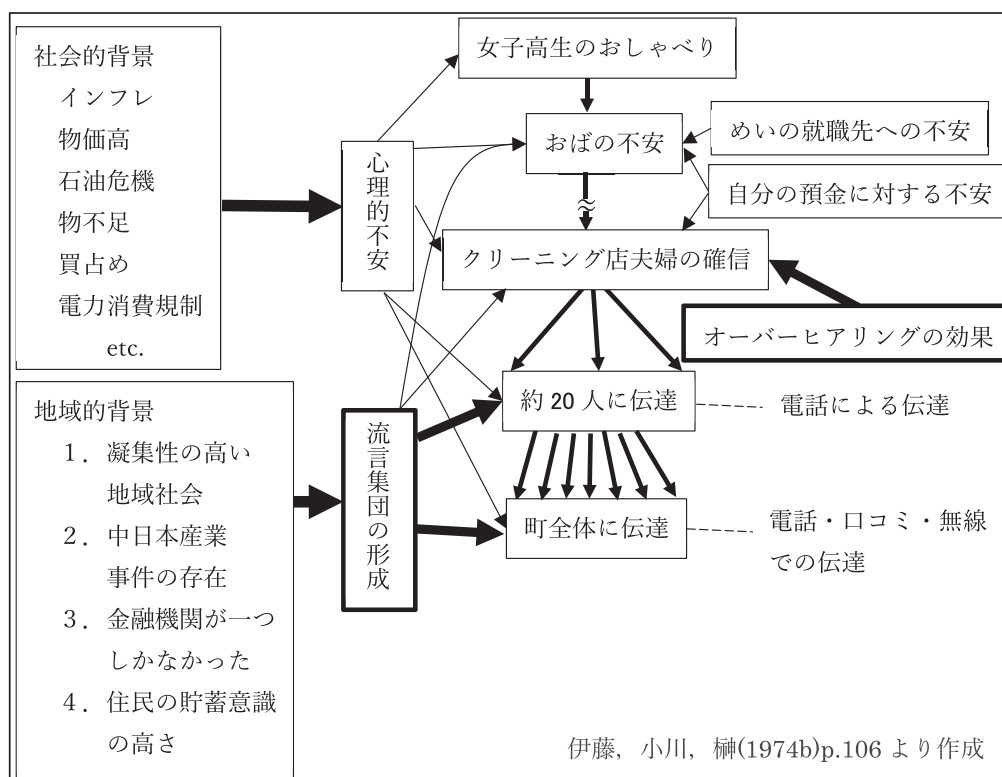
以下に、豊川信用金庫倒産デマ発生条件分析の構図を載せる。

ここでモデル分析および実験分析と照らして考察する。

モデル分析では各預金者の引き出す確率が  $p(s) > s$  (準備率) の場合に金融破綻が起こることを示した。支払い余力があることが信じられれば、 $p$  が低下し、金融機関も全ての預金者が預金し続けるという、ペイオフ支配戦略の均衡が起こりうる。

上記の取り付け騒ぎが起こる時代的・地域的特性を鑑みると、事件が起こる前までの豊川信用金庫に対する地域住民の信頼は厚かったと考えられる。それゆえ、高い準備率  $s$  の予想に結びつき、それが引き出す誘因  $p(s)$  を下げて  $q = 0$  を実現させていただろうことと推察できる。

ところが、女子高生Aから始まった不安の連鎖が、クリーニング店夫婦のH、Iの耳に入り、さらにJの電話がオーバーヒアリング効果をもたらし、H、Iの不安を確信へと変え、流言を伝達する集団が加速



「取り付け騒ぎ」に関する理論的・実験的分析と事例との整合性に関する考察（有馬，齋藤，小林，稲葉）

度的に増えていったと考えられる。こうして、豊川信用金庫破綻という風評は確信に近い形でこの凝集性の高い町全体に伝わった。

再び理論モデルと実験モデルに戻れば、金融破綻の起こるほどの引き出し確率  $p$  をもたらず、破綻を引き起こしうるリスク支配戦略の均衡も、銀行の体力の指標  $s$  に対し予見がブレて不信感が増長すれば（ $s$  が低下すれば）発生しうることを、表に挙げた具体例からも見て取れる。そして、それは仮に経営が健全だったとしても、つまり、現実の  $s$  に照らせば引き出す誘因がない場合でも、豊川信用金庫（および佐賀銀行）のような風評被害が発生し、それが一般に広く信じられると取り付け騒ぎが起こりうる事がわかる。実験に照らせば、「預金を引き出さない」ボタンがない状態でのクリック音は、明らかに引き出す者の存在を示す。実験における一人ひとりの引き出しの影響力は非常に高いため、取り付け騒ぎが発生する事態に近づくシグナルになりうる。まさに理論および実験モデルの推察を具現化したような事例である。

#### (5) 業績悪化による取り付け騒ぎの例：木津信用組合

続いて、業績悪化による取り付け騒ぎがあった事例として、木津信用組合の事例<sup>11)</sup>を掲載する。

木津信用組合は、大阪木津地方卸売市場関係者のための金融機関として業者から出資を募って1953年に発足した。以来、1979年に富国信用組合、1986年には大阪光信用組合を合併し、1995年には貸出金が1兆円に達するマンモス信用組合にまで成長していた。しかし、その融資先のほとんどが不動産関係であったため、バブル期の積極的経営が裏目に出て、検査で明るみに出たときには不良債権が貸出金の83%にまで及んでいたという。1995年8月に大阪府が、最終的に預金の支払いを除く業務停止命令を発動して収集を図った。実はこの1ヶ月前にコスモ信用組合が東京都から業務停止命令を受けており、その状況下で木津信用組合に対しての経営不安説が流れ、取り付け騒ぎが発生していた。そのような折に業務停止命令が出たことが報道され、預金者が同信用組合に殺到する場面がテレビニュースでも放映された。同信用組合は大手銀行からの紹介預金を導入し、急速に資産を増やしていったが、行き過ぎた紹介預金について、金融当局から指導を受けたため、大手銀行は急激に資金の引き上げを行った。これが木津信用組合に致命的な打撃を与えることとなった。このケースは経営者の不動産投資に特化した結果、バブルの崩壊により経営内容を悪化させたものと考えられる。また、同信用組合の理事長の経営がワンマンであって、そのガバナンスが機能しなかったこと、さらには理事長が関与する企業への融資等、組合を私物化していたことも破綻の一因となっていった。

ある意味、バブル期崩壊時の象徴的事件であった木津信用組合の破綻であるが、ファンダメンタルズの悪化による取り付け騒ぎへの影響については、明示的に取り上げる形にはなっていないこともあり、あくまで今回は業績悪化の一事例として取り上げさせてもらった。今後の研究に加えていきたいと思う。

#### (6) 経営悪化と失言によるケース：東京渡邊銀行の事例<sup>12)</sup>

東京渡邊銀行は、昭和金融恐慌で多くの銀行破綻が生じた中で、取り付け騒ぎ発生契機になった事例の一つなので、今回簡単に触れておく。

この事件は1927年3月の衆議院予算委員会において、震災手形整理2法案審議の中で片岡蔵相の「東京渡邊銀行がとうとう破綻しました」という失言が、当時資金繰りに窮しており、破綻寸前の状況であっ

た東京渡邊銀行の取り付け騒ぎにまで発展した。ここから金融恐慌が発生し、同年の3月から4月にかけてだけでも31もの銀行が休業に追い込まれている。こうした銀行の破綻により預金の一部が切り捨てられたため、当時の預金者は、風評が立てば取り付けに走るようになった。このケースは、失言と経営悪化の両方が絡んでいるが、経営悪化の実態があるため、大臣の失言がトリガー (trigger) とはなっているものの、そもそも経営実態が悪化している下地が本質であると考え、今回の実験での新たな取り付け騒ぎの原因の分析対象とは異なるものとして簡単に触れるに留める。

## 5. 終わりに

本研究の目的は、金融危機に結びつくような金融機関の取り付け騒ぎの発生するメカニズムを解明することにあった。それを受けて、理論的分析・実験的分析が行われ、他編でその詳細を明らかにした。その中で、本稿の役割はそれらの帰結と現実の事例との整合性を確認することにあった。

東京渡邊銀行や木津信用組合のように昭和金融恐慌やバブル崩壊後など金融危機の時に起きる取り付け騒ぎは、該当図に基づいて考えると、支払い余力  $s$  の悪化 (減少) によって  $q = 0$  から  $q = 1$  への変化によって生じると考えられるが、これは金融機関の財務内容等が悪化していく段階で、それが報道などにより預金者に伝わっていく過程といえる。この報道の中には、現実に金融機関に殺到する預金者の姿が含まれていることもある。今回特異な例として挙げた豊川信用金庫の事件では、噂話があたかも豊川信用金庫が破綻するかのような信憑性を持って拡大して行き、それが実際に  $s$  を減少させる結果を招き、取り付け騒ぎが発生したものだと考えられている。

実験の中では、被験者は2章の理論モデルで解釈すると、 $p(s) < s$  の区間で被験者は行動を行っており、強制引き出しが発生したとしても、銀行は破綻しないということはわかっている状態である。これはある意味、財務内容が完全に公開されている状態とも言える。したがって、被験者が合理的であるならば、理論上は取り付け騒ぎによる銀行の倒産が起きることはない。それにもかかわらず、実験では多くの取り付け騒ぎが発生していた。

他編の理論分析でも触れられているように、もし対称モデルの中の代表的預金者が完全予見的であれば、 $p(s)$  は  $q$  と一致する。しかし、各預金者は均質的ではなく、個々の混合戦略  $p(s)$  を実際に観測することは不可能である。そうした場合、各個人の予見にブレが生じて、完全に  $q$  と一致するのが難しくなっている状態であると言える。その場合、たとえ  $q = 0$  ( $s > p$ ) であるとしても、 $p(s) > 0$  となる可能性がある。そして、それが仮に小さな確率であったとしても、強制引き出しと重なることによって銀行破綻と結びつき、その可能性が他の預金者の混合戦略を変化させて取り付け騒ぎが起これと考えることができる。実験を通して、銀行に体力のあるBタイプの利得表を使ったケースではほとんど取り付け騒ぎが発生しなかったのに比べ、体力のないAタイプの利得表を使ったケースで非常に多くの取り付け騒ぎが観測されたことは、確率の小さなブレが、より高い確率で破綻を招いてしまうということが予見された結果であると解釈することができる。その意味でも、豊川信用金庫の事例は、小さなブレが取り付け騒ぎを生んだという点で、今回の理論的予測および実験結果と整合的な現実の例として考えられよう。

また、今後の研究の方向性は、他編の中で主に述べられているので再掲しないが、大まかに述べれば実験の精緻化や、今後影響力を増すだろうと考えられるビットコイン等に代表される仮想通貨 (暗号通貨) まで網羅した、理論・実験・事例研究を両立させようような研究を進めていきたい。



「取り付け騒ぎ」に関する理論的・実験的分析と事例との整合性に関する考察（有馬，齋藤，小林，稲葉）

## 注

- 1) 本研究は、日本大学経済学部経済科学研究所の共同研究 A (2016~17) によって、資金援助を受け、行ったものである。
- 2) 日本大学経済学部専任講師
- 3) 日本大学経済学部准教授
- 4) 関西大学経済学部教授
- 5) 関西大学経済学部教授
- 6) 長岡・竹村 (2008), p.10 に基づく。
- 7) 関谷 (2011), p.132
- 8) 伊藤・小川・榎 (1974a) に基づく。なお、登場人物は全て各個人にアルファベットで割り当てた。
- 9) 以下の時代的下地、地域的特性の考察は、伊藤、小川、榎 (1974b) pp.106-107 による。
- 10) オーバーヒアリング効果とは、一般的に第三者と対面を通じて聞いた話より、第三者が話していることを偶然聞くことの方を信じやすいという効果。今回の場合は、J の豊川信用金庫からお金を引き出す要求の電話を耳にするという偶然耳に入った情報がそれに当たる。
- 11) 長岡、竹村 (2008) PP.6-7
- 12) 同掲書, PP.3-4

## 参考文献

- Diamond Douglas W. and Philip H. Dybvig (1983). “Bank runs, deposit insurance, and liquidity”, *Journal of Political Economy*, 91 (3), 401-19.
- Garratt, Rod and Todd Keister (2009). “Bank runs as coordination failures: An experimental study”, *Journal of Economic Behavior and Organization*, 71 (2), 300-17.
- Gertler, Mark and Nobuhiro Kiyotaki (2015). Banking, Liquidity, and Bank Runs in an Infinite Horizon Economy. *American Economic Review*, 105 (7), 2011-43
- Hori, Masahiro, Yasuaki Ito, and Keiko Murata (2005), “Do Depositors Respond to Bank Risks as Expected? : Evidence from Japanese Financial Institutions in the Banking Crisis”, *ESRI Discussion Paper Series No.151*
- 石井正幸 (2000) 『地銀大再編：地場企業はこうなる』朝日新聞社
- 伊藤陽一, 小川浩一, 榎博文 (1974a) 「デマの研究：愛知県豊川信用金庫 “取り付け” 騒ぎの現地調査 (概論・諸事実稿)」, 『総合ジャーナリズム研究』第 69 号, 東京社, pp.70-80
- 伊藤陽一, 小川浩一, 榎博文 (1974b) 「デマの研究：愛知県豊川信用金庫 “取り付け” 騒ぎの現地調査 (考察・分析編)」, 『総合ジャーナリズム研究』第 70 号, 東京社, pp.100-111
- 関谷直也 (2011) 『風評被害 そのメカニズムを考える』光文社新書
- 長岡壽男, 竹村俊彦 (2008) 「金融機関における取り付け騒ぎの事例研究：リスクマネジメントの観点からの考察と提案」『RCSS ディスカッションペーパーシリーズ』第 73 号
- 服部泰彦 (2006) 「銀行の経営破綻と預金流出—預金者における市場規律—」『立命館経営学』第 45 巻第 4 号
- 林幸雄 (2007) 『噂の広がり方：ネットワーク科学で世界を読み解く』DOJIN 選書 9

